

ばていお大門蔵物語

ばていお大門は、約10棟の古い商家や蔵を再生させ、利用しています。それぞれの建物に伝わる歴史や、昔の商売、人々の暮らしぶりについて、ご紹介します。

文具・事務用品の店 **1** 柏義

大正末期、元禄時代から続いた「はやかわ紙店」から事業、店舗ごと引き継いで創業しました。昭和30年代に入り、文具や事務用品を扱い始め、最盛期には一日に250人もの来店者があったといいますが、今の店舗は当時のものを改修して使っており、2階の重厚感ある梁が往時を偲ばせます。店舗奥にあった土蔵と住居は取り壊されましたが、中庭にあった石灯籠や松、北側の壁はそのままの姿を残しています。

明治政府の専売所 **2** 長野煙草元売捌所

明治37年、たばこの卸売りが専売制となり、大正から昭和の初めにかけて、ここが専売所として販売を行っていました。その後、平成元年には「小川の庄」が店舗。通りに面して表に店舗、奥には元来3連蔵だった蔵が2棟残っていて、事務所や倉庫としても利用。特に蔵は漬け物類を自然な状態で保存できるため、重宝していたそうです。

江戸時代から続いた商家 **3** 増太・増屋本店

この建物をはじめ、中庭に面した蔵、その奥の三階建ての建物「養気館」ほか一帯は、江戸時代から続く商家、宮下家の居住地でした。江戸時代には信濃町の伝統工芸品「古間鎌」を販売、その後は家庭向けの金物類全般を扱うようになりました。店奥には商品をおさめた「三連蔵」が並んでいて、明治時代には敷地内にレールを敷き、トロツコで蔵から店へと商品を運んでいたといわれています。

草履や靴などを商う履物店 **4** 小野庄

昭和30年代初め頃まで履物店として営業。店の奥は現在のばていお大門の中庭にあり、ここに母屋や庭、作業場、蔵などがありました。中庭の突き当たりの蔵は当時のものです。昭和50年代からは空き店舗になっていましたが、平成13年に地元、大門町南方の有志らが出資した「長野大門会館が土地と建物を取得し、入口の建物を修復。ばていお大門全体の開業より一足早い、平成14年に新しい店舗がオープンしています。

はかりから測量機器へ **5** 山内商店

明治15年創業、度量衡の製造販売業「藤野屋 山内商店」。時代の流れとともに、主な業務は秤の製造から測量機器の販売へと移行していきました。昭和30年、社名を「山内商事株式会社」に改め、計量器のほか複写機や事務機器の販売も本格化。この頃は若松町に長野市庁舎があり、業務を拡大していきました。山内商事は昭和52年に本社を卸センター（現在の長野アークス）に移転、大門の店舗も時代が平成に移る頃には、その役目を終えて閉店しています。

商家の隆盛を物語る **6** 山内家の茶室や庭

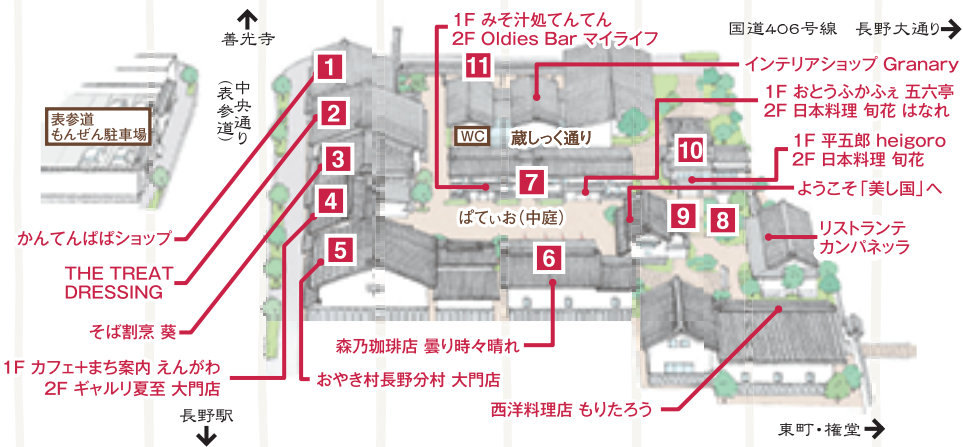
表参道に面して店舗があり、測量機器や日用品の販売を行っていた山内家。その敷地は西から東に長く延びていました。この場所にあったのは、茶室、離れ、庭蔵など。昭和初期に建てられた茶室に面した坪庭には、つくばいや石灯籠がありました。一番奥（東側）には立派な蔵があり、古い秤や測量機が入っていました。が、損傷が激しく、ばていお大門整備に際して解体されました。

100年前の蔵を曳き家で保存 **7** 三連蔵

中庭に面した蔵は、商売繁盛を願って、間口幅を七間・五間・三間と縁起の良い数字に変えて建てた三連蔵でした。ばていお大門建設の際に、消防法上の理由から一番手前の三間蔵を取り壊しましたが、残った2つの蔵は建っている状態のまま、「曳き家（ひきや）」で移動させました。ジャッキで蔵を土台から上げ、職人の経験を駆使してじわじわ動かす。ふたつの蔵を8m動かすのに、5〜6人の職人で2ヶ月ほどかかりました。

明治〜大正に活躍した 庭園師による **8** 宮下家の庭園

このあたりは江戸時代から金物商を営んでいた宮下家の庭園でした。明治時代に、当時長野を中心活躍していた庭園師「馬場磯松園」に依頼して作庭されたもの。磯松園は作庭を芸術品の創作ととらえていて、周囲の環境や建物と調和する庭を作ることを目指し続けました。当時の庭には手を加えられましたが、茶室周辺の石や築山などに、当時の面影を残しています。



明治期の2階建て茶室 **9** 無心庵

この茶室は隣接する三階建て望楼建築「養気館」とあわせ、明治中期に創建されたものです。宮下家を訪れた文化人たちが、茶を楽しむ、憩いのときを過ごしました。つくばい、水屋などを備え、「手斧削り」の床柱など、当時のまま残っています。茶室としては珍しい2階建てで、これは美しい庭園を見下ろすためと推測できます。茶室から見えるサルスベリやもみじも当時のものものです。

文化人が愛した三階建て楼閣 **10** 養気館

明治中期に建てられたこの建物は、明治から大正にかけて、松井須磨子、島村抱月、高村光雲、相馬御風、中山晋平、高野辰之ら多くの文化人が訪れた場所でした。「養気館」という名も、英気を養う心地よい場として、訪れた客が名付けたものです。建物は木造三階建ての伝統的な「望楼建築」。最上階の三階は、昭和の初め頃まで、夕涼みやえびす講の花火を眺める来客向けに使われました。

善光寺七小路のひとつ **11** 下堀小路

国道406号線が拡幅される前、大門交差点から東町交差点までの間にあった「善光寺七小路」の一つ。今の大通りの北側、幅にして一車線程度の細い道で、その名の通り昔は堀があって、その下側にあつたからこう呼ばれたそうです。堀の上側に位置し、藤木庵脇から東町に延びているのが「上堀小路」。善光寺七小路はほかに、花屋小路、虎小路、法然小路、羅漢小路、桜小路があります。



「長野煙草元売捌所」として営業していた当時



大正末期〜昭和初期の「増太・増屋本店」



長く空き店舗だった「小野庄」の建物



大正〜昭和初期の「藤野屋 山内商店」



曳き家(ひきや)中の二つの蔵



2002年、整備前の「養気館」



2002年頃、整備直前の「ばていお大門」



現在の中庭はつるや雑草に被われていた